

⑥日露戦争

(1) 日本、朝鮮、ロシア (山田、40-41 頁)

- 小村・ウエーバー協定 (1896.5.14)
- 在朝鮮日本公使小村寿太郎 ロシア公使ウエーバー
朝鮮国王の王宮帰還の促進、居留地・電信線保護のための駐兵数についての合意
 - ① 居留民保護のための兵力
京城に二個中隊、釜山に一個中隊 (一個中隊は 200 名以内)
 - ② 電信線保護のための兵力も 200 名を超えないこと
 - ③ ロシアも日本と同数の兵力を朝鮮国内に駐屯させることができる
- 山縣・ロバノフ協定 (同.6)
日露両国が朝鮮への財政支援を行うこと
日本が架設した電信線は日本側がそのまま管理する。
但し、ロシアも電信線架設の権利
秘密条款…朝鮮国内の治安混乱などの場合、日露の合意のもとでさらに軍隊を派遣できることと日露両軍は同数の軍隊を朝鮮国内に駐屯させる (但し、朝鮮に近代的な軍隊が確立するまで)

◎二つの協定から

ロシアは朝鮮国内での諸権利獲得 (日本とほぼ同等)
朝鮮における日本の駐屯兵力の事実上の削減

(2) 北清事変 (北岡、112 頁。川島・服部編、67-68 頁。)

- 義和団→北京で包囲された各国公使館は本国政府に救援を求め、8 カ国共同で軍隊派遣
(英米仏露独伊墺日)、鎮圧。「脱亜入欧」の一段階？
- 北京議定書 (1901)
中国側は賠償金として 4 億 5000 万両 (下関条約の 2.5 倍)
日本は賠償金全体の 7.73% 列国の撤廃。公使館への守備兵常置。
ロシア軍…満洲においては駐兵継続の姿勢 (事変では治安維持を名目に 16 万人を超える兵力)

(3) 「多角的同盟・協商網」 (北岡、112-113。川島・服部編、68 頁。)

- 「満漢交換」論＝満洲におけるロシアの優越権を認める代わりに

韓国における日本の優越権をロシアに認めさせる。

- 日英同盟論と日露協商論 （北岡、114 頁。川島・服部編、68 頁。）
イギリス、ロシアへの警戒（ロシアが遼東半島を租借した 1898 年頃～）
※フランスはロシアとの同盟国※アメリカは孤立主義的
※ドイツは英独同盟と露仏同盟の対立・緊張関係は望まず。

「二強国標準」(two-power standard)

世界第 2 位+世界第 3 位以上の海軍力を持っていれば、同盟は不要である。

⇔ドイツの急速な海軍力の増強

日英同盟論者（桂太郎首相・小村寿太郎外相・加藤高明駐英公使ら）

日露協商論者（伊藤博文・井上馨ら）

→「満漢交換」実現のために日英同盟の圧力によって日露協商の締結を目指す点では一致。

（日露協商論者でも日英関係緊密化に反対ではない）

1902 年に日英同盟締結。

- ロシア；満州問題は基本的に中国との問題
⇔日本；満州問題を韓国問題と連関させて満漢交換論の実現 1904 年 2 月、交渉断絶。
（川島・服部編、69 頁←千葉功『旧外交の形成—日本外交 1900～1919』勁草書房、2008 年）

(4) 日露戦争開戦

※日本：外交関係断絶の通知に「独立ノ行動ヲ取ルコトノ権利」

ロシア：外交断絶の通知と宣戦布告は別

宣戦布告以前の攻撃は当時の国際法ではまだ違法ではなかった。（横手、115 頁）

- 奇襲（外交断絶と軍事作戦の着手） （横手、113-116 頁）

①京城の確保（日本陸軍）

1904.2.6 先遣徴発隊 佐世保から輸送船で出発。仁川へ

京城入り。第一軍の主力である第一二師団の上陸地を馬山から仁川に変更。→韓国南部の占領

②制海権の確保

1904.2.8 連合艦隊は旅順港も接近。←旅順港外に停泊中のロシア太平洋艦隊を攻撃。戦艦 2 隻大破／7 隻中、巡洋艦 1 隻／4 隻（しかし、これらの艦船は港に引き戻される）翌日に再び、旅順港内の艦船にめがけて砲撃を行うが、反撃に遭い、成果を挙げられず。（しかし、ロシア艦隊も港内に閉じこもった状態。）

- 作戦計画 朝鮮半島南部に限定→平壤奪取が加えられた。
 - ◆ 第一二師団は仁川に到着してはじめて、自軍の目標地が京城ではなく、平壤であることが知らされた。
 - 大本営 （横手、116 頁・120 頁・126-127 頁）
 - 2.29 第一軍（黒木為楨^{ためもと}司令官）を鎮南浦^{チンナンポ}に上陸させ、朝鮮半島北部から南満州に向かわせ、第二軍（奥村保鞏^{やすかた}司令官）を遼東半島（最終的に塩大澳^{えんたいおう}）に上陸させることを決定。
 - ※第一軍；近衛師団・第二師団・第十二師団
 - 第二軍；第三師団・第四師団・第六師団・騎兵旅団・砲兵旅団
 - 第三軍；第一師団・第一一師団・第九師団 （乃木希典中将；6 月末に大将）
 - 5 月末に編成
 - 第四軍；独立第一〇師団・第五師団・歩兵旅団 6 月末に編成
 - 鴨緑江渡河作戦；第一軍の三個師団から 4 万 2500 人（ロシアの二倍以上の規模）
 - 第二軍は塩大澳への上陸
 - 独立第一〇師団は大孤山に上陸。

● 死傷者数（横手、121-122 頁）

①日本の記述

鴨緑江～九連城での戦闘；日本側 932 人 ロシア側 1800 人
金州の南山 ；日本側 4387 人
得利寺 ；日本側 1145 人

②ロシアの記述

鴨緑江の戦闘 ；ロシア側 2781 人 日本側 1000 人
金州の南山 ；ロシア側 1400 人 日本側 3450 人
得利寺 ；ロシア側 3563 人 日本側 1190 人

● 遼陽の戦い（1904.8） （横手、129・131-133 頁）

遼河の支流である太子河と東清鉄道南部視線が交叉する交通の要所。ロシアの防禦陣地日本の第一軍は遼陽の東南から太子河右岸に入って奉天との連絡路を襲い、ロシア軍の退路を遮断する。第二軍・第四軍は南側からの攻撃によって、それをサポートする戦術。→ロシア、遼陽を明け渡す。

	日本	ロシア
戦闘員数	13 万 4500 人	22 万 4600 人
死傷者数	2 万 3533 人	約 2 万人

日本の戦史による戦闘員数と死傷者数 （横手、131 頁）

※この戦闘が起こる直前の 8 月半ばに旅順総攻撃で 1 万 5800 人もの死傷者。

弾薬の不足 鴨緑江戦での日本軍歩兵の銃弾使用は 84 万発余り
遼陽の戦いでは鴨緑江のおよそ 10 倍。

● 黄海海戦 （横手、137 頁・140-141 頁）

※日本にとっての問題はロシア艦隊が旅順港に残る状態で、ヨーロッパ方面から別のロシア艦隊が太平洋に到達することであった。→制海権を失う公算が高かった。

- ◆ 8 月 10 日早朝に出港した太平洋艦隊が昼間に連合艦隊（日本）に補足され、旅順港南東方面で海戦。それから夕刻に連合艦隊は黄海沖で取り逃がしたロシア艦隊に追いつく。
- ◆ 旗艦「ツェザレヴィッチ」に損傷を与えた。
- ◆ 太平洋艦隊長官ヴィットゲフトが戦死。しかし、その艦船は四方に散り、一隻も撃沈されず。
- ◆ 中立国に入ったロシアの艦船はそこで武装解除。樺太付近まで逃げて、自沈したロシア艦も
- ◆ 戦艦四隻など 10 隻のロシア艦船が旅順港に帰港。

● 旅順攻撃 （横手、147-149、155・159 頁）

- ◆ 第一回総攻撃（8 月）…日本軍の参加戦闘員 5 万 700 人内、
死傷者 1 万 5800 人
- ◆ 第二回総攻撃①（9 月 19 日～23 日）…死傷者 4700～4800 人
「二十八^{さんち}米榴弾砲」；海岸防備のためにつくられたのだが、要塞攻撃に転用。
- ◆ 第二回総攻撃②（10 月 26 日～31 日）…死傷者 3830 人。
「二十八^{さんち}米榴弾砲」は堡塁の一部を破壊した程度に留まる。

- ◆ 東郷司令長官×乃木第三軍司令官 「まず敵艦撃破」方針
 ⇨満洲軍総司令部の反対(「二十八^{さんち}瓏米榴弾砲」はすべて要塞攻略に利用すべき)
 「御前会議」の結果、「まず敵艦撃破」のために旅順港を俯瞰する二〇三高地を
 占領する方針へ

- ◆ 第三回総攻撃(11月27日～) 二〇三高地を攻撃目標
 ※ロシアも5月には二〇三高地の戦略的重要性を認識し、防備を固めていた。(内
 濠・鉄条網・交通濠・^{ろくさい}鹿砦；陣営周辺にめぐらせた障害物など)
 「二十八^{さんち}瓏米榴弾砲」を集中させ、突撃を繰り返す。→二〇三高地占領。

- 沙河の海戦 (満洲) (横手、150頁・153頁) 10月9日～20日
 ※遼陽の北方に陣を広げていた日本軍を太子河の左岸に押し戻そうとした。(ロシア軍)
 ロシア軍 19万5000人 日本軍 13万1000人
 20日までの戦闘で日本軍の死傷者は2万769人
 ロシア側の死傷者と行方不明者は4万769人

- 奉天の会戦 (横手、171頁)
 日本軍；25万人、砲992門、機関銃268挺
 最右翼；鴨緑江軍(川村景明司令官)
 最左翼；第三軍(旅順陥落後に再編)
 中央西；第二軍
 中央；第四軍
 中央東；第一軍
 ロシア軍；29万2300人、砲1386門、機関銃56挺

- 日本海海戦 (横手、184頁)
 日本側
 「三笠」がかなり被弾していたが、戦闘遂行には問題がなかった。
 水雷艇3隻沈没、死傷者700人弱

ロシア側 死傷者5800人余

- (5) ポーツマス条約(1905年8月) (北岡、116-117頁)

- ロシアは日本の朝鮮における支配的な地位を認める。
- 遼東半島租借権の獲得、東清鉄道南部支線の長春以南の譲渡
- 樺太の南半分を割譲
- 賠償金はなし。→日比谷焼き討ち事件

(6) 日清戦争と日露戦争の対比 (戸部、138-140 頁)

- 戦死者

①日清戦争全期間の陸軍の戦死者（死傷者・病死者含む） 約 1 万 3000 人

→その 8 割が大陸での戦闘終了 台湾占領に伴う病死者

赤痢・マラリア・コレラ・脚気

②日露戦争の陸軍の戦死者 約 8 万 4000 人

→うち、約 2 万 3000 人が戦病死 腸チフス、脚気、赤痢

- 戦費

①日清戦争の戦費

臨時軍事費 約 2 億円 ※戦争前の 1893 年年度の歳出が 8500 万円程度

国家財政規模の 2 年以上

②日露戦争の戦費

臨時軍事費と各省の臨時事件費 約 17 億円

※戦前の歳出のピークは 1900 年度の 2 億 9000 万円 国家財政規模の約 6 年分外債 (北岡、114-115 頁)

アメリカ…対満洲貿易の維持発展。門戸開放の原則からロシアの政策に批判的

イギリス…同盟国として好意的な対応。極東に向かったロシアのバルチック艦隊

に対して、イギリスはスエズ運河の使用を拒絶し、植民地における燃料の供給などを制約

(7) 白兵主義 (戸部、156-157 頁)

- 白兵戦＝刀や銃剣などをもって至近距離で格闘する戦闘
- 攻撃精神の強調

→日露戦争では、敵軍との白兵戦に苦しむ、時に自軍に攻撃精神の不足が出てしまった。兵力の火力に頼って、攻撃精神がそがれることへの警戒

参考文献

戸部良一『逆説の軍隊』中公文庫、2012年

北岡伸一『日本政治史—外交と権力』有斐閣、2011年

山田朗『世界史の中の日露戦争』吉川弘文館、2009年

川島真・服部龍二『東アジア国際政治史』名古屋大学出版会、2007年

横手慎二『日露戦争史—20世紀最初の大国間戦争』中公新書、2005年